

大豆管理情報 (第4号)

令和5年8月21日
農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過

(1) 気温

5月下旬の平均気温は、19.3℃と（対平年差+0.3℃）と平年並であった。
6月の平均気温は、22.7℃（同+1.3℃）と平年に比べかなり高かった。
7月の平均気温は、27.7℃（同+2.2℃）と平年に比べかなり高かった。
8月上中旬の平均気温は、30.8℃（平年差+3.4℃）と平年よりかなり高かった。

(2) 降水量

5月下旬の降水量は、83.5mm（対平年比231%）と平年に比べかなり多かった。
6月の降水量は、213.0mm（同123%）と平年に比べ多かった。
7月の降水量は、362.5mm（同148%）と平年に比べ多かった。
8月上中旬の降水量は、9.0mm（同7%）と平年に比べてかなり少なかった。

(3) 日射量

5月下旬の平均日射量は、17.8 MJ/m²/日（対平年比93%）と平年に比べ少なかった。
6月の平均日射量は、17.9MJ/m²/日（同103%）と平年並であった。
7月の平均日射量は、20.2MJ/m²/日（同122%）と平年に比べかなり多かった。
8月上中旬の平均日射量は、22.7MJ/m²/日（同121%）と平年に比べかなり多かった。

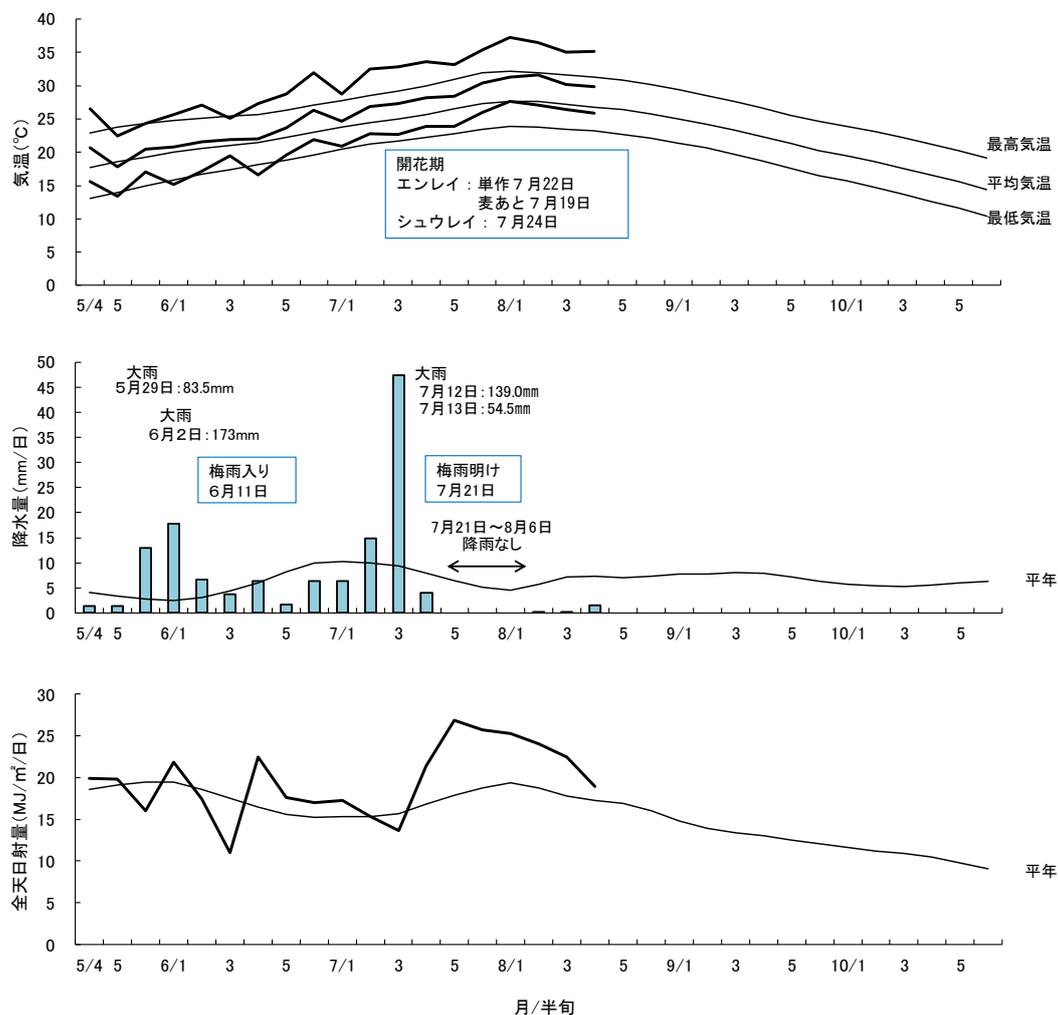


図1 令和5年の気象経過 (富山地方気象台)

2 生育経過（生育観測ほデータ）

(1) エンレイ（単作）

単作は、主茎長 73.1cm、本葉葉数 12.9 葉、一次分枝数は 2.3 本であった。
 平年に比べ、主茎長、本葉葉数は並、一次分枝数は 0.4 本少なくなっている。

(2) エンレイ（麦あと）

麦あとは、主茎長 66.9cm、本葉葉数 12.3 葉、一次分枝数は 2.8 本であった。
 平年に比べ主茎長、本葉葉数は並、一次分枝数は 0.1 本少なくなっている。

(3) シュウレイ

主茎長 57.6cm、本葉葉数 11.9 葉、一次分枝数は 3.7 本であった。

表 1 大豆生育観測ほ調査結果（8月21日調査）

品種	年次	播種日 (月日)	栽植本数 (本/m ²)	主茎長 (cm)	本葉葉数 (葉)	一次分枝数 (本)	開花期 (月日)
エンレイ	単作	R5	17.4	73.1	12.9	2.3	7月22日
		R4	16.3	86.9	13.5	2.7	7月19日
		平年	16.4	74.4	12.7	2.7	7月17日
	平年比・差	8	106	98	0.2	-0.4	5
エンレイ	麦あと	R5	16.5	66.9	12.3	2.8	7月19日
		R4	17.7	84.7	12.3	3.4	7月23日
		平年	16.7	69.7	12.1	2.9	7月22日
	平年比・差	-2	99	96	0.2	-0.1	-3
シュウレイ	単作	R5	13.0	57.6	11.9	3.7	7月24日
		R4	15.5	76.8	12.5	3.0	7月21日
		平年	15.3	67.1	12.3	3.4	7月22日
	平年比・差	6	85	86	-0.4	0.3	2

注)調査ほ場数:エンレイ(単作5、麦あと3)、シュウレイ(単作3)

注)平年値はH25~R4

注)平年比(差):栽植本数、主茎長は平年比、播種日、本葉葉数、一次分枝数、開花期は平年差

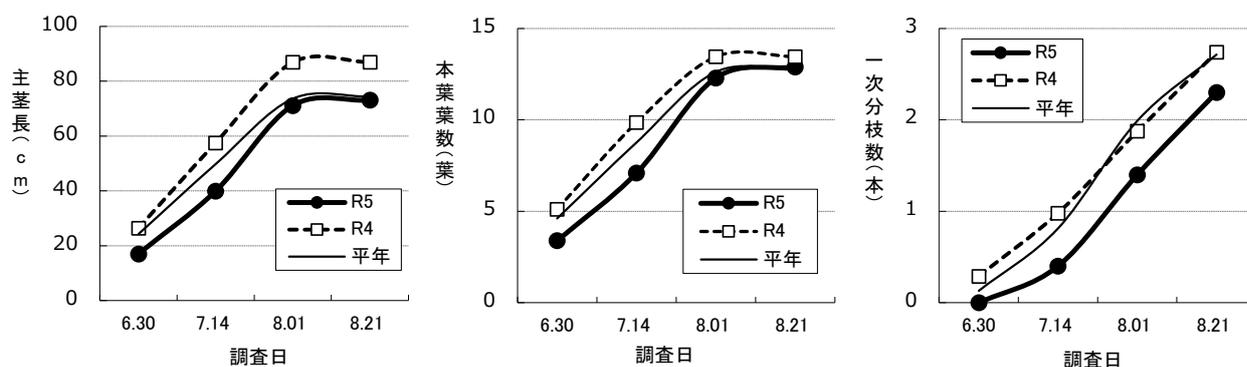


図 2 単作エンレイの生育経過

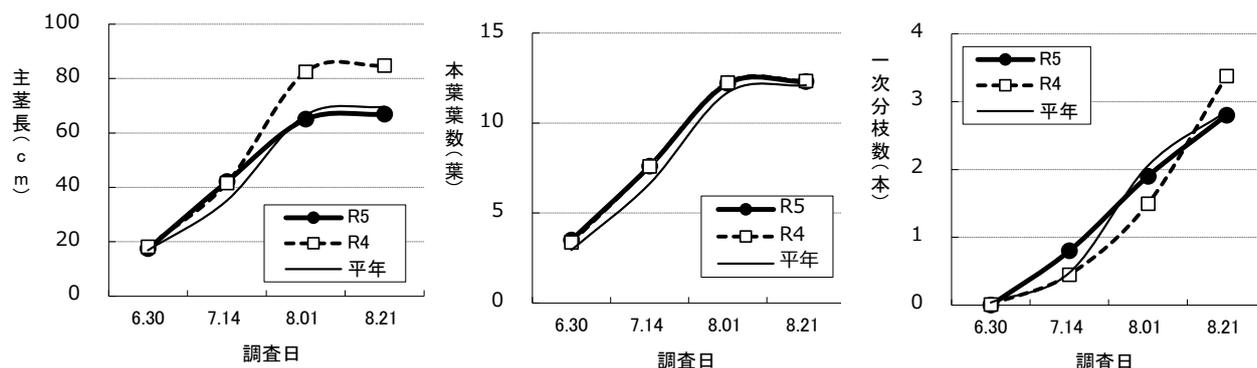


図 3 麦あとエンレイの生育経過

3 当面の技術対策

- ・子実肥大期を迎えており、最も水分が必要な時期となっているため、土壌の乾き具合に応じて積極的に畦間かん水を行う。
- ・紫斑病及びカメムシ類の2回の基本防除を徹底する。ハダニ類やカメムシ類の発生が多くなっているため、発生状況に応じ随時防除を実施する。
- ・難防除雑草の発生がみられる場合は、雑草の結実前に防除を徹底する。

(1) 土壌の乾き具合に応じた畦間かん水の実施

- ・9月上旬頃までは最も水分が必要な時期となっており、百粒重の確保や落莢の防止による莢数の確保と青立ちの防止を図るため、晴天日が3日以上続いた場合は、土壌の乾き具合に応じて積極的に畦間かん水を行う。
- ・かん水は短時間で実施し、ほ場全体に水が行き渡ったら、水口をしっかりと止めて速やかに排水する。(水をためたままにしない)
- ・畦間かん水を行う際は、下流域まで十分に水が行き渡るよう地域内で調整し、効率的かつ計画的な用水の利用が行われるよう配慮する。

葉裏が見えて白く見える



写真1 水不足の大豆ほ場

(2) 排水対策の徹底

畦間かん水時の入排水や降雨後の排水をスムーズにするため、溝の手直しや連結、排水口の掘下げを行う。

(3) 適期の病害虫防除

【基本防除】

- ・紫斑病とカメムシ類に対して、2回の基本防除（8月2～3半旬頃と4～5半旬頃）を徹底する。
- ・同一系統の薬剤の連用は避け、莢や茎葉に薬剤が十分かかるように散布する。

【随時防除】

ア ハダニ類

- ・高温乾燥が続き、ハダニ類が急激に増殖している。
- ・黄化した葉が目立つ場合は「ニツラン水和剤」等で早急に防除する。なお、防除の際は葉裏にも薬剤が十分かかるように散布する。



写真2 ハダニ類による葉の黄化



写真3 ハダニ類（葉裏に多い）

イ カメムシ類

- ・カメムシ類は子実を吸汁するため、被害粒の増加と品質低下や青立ちの発生要因になる。
- ・9月上旬に1.8m間の払い落とし虫数が2頭以上みられる場合や山際等の常発地域では、追加防除を実施する。



ホソハリカメムシ



イチモンジカメムシ



写真5 カメムシ類の吸汁被害

写真4 大豆を加害する主なカメムシ

ウ ハスモンヨトウ

- ・若齢幼虫による白変葉被害がみられたら、速やかに被害葉を取り除き、ほ場外で処分するとともに、発生状況に応じて薬剤を散布する。 なお、防除の際は葉裏にも薬剤が十分かかるように散布する。



写真6 若齢幼虫による白変葉被害



写真7 葉裏にいる分散前の若齢幼虫

エ 葉焼病

- ・強風雨でまん延し、多発すると収量、品質が低下する。
- ・強風雨による葉の破損が予想される場合は、その直前又は直後に「Zボルドー」等で防除する。

(4) 雑草対策の徹底

- ・大型雑草や帰化アサガオ類、イヌホオズキ類等の難防除雑草の発生に注意し、雑草が結実する前に防除（手取り、除草剤塗布、地際からの刈取り等）を徹底する。特に、イヌホオズキ類の液果は汚損粒の原因となるため確実に防除する。